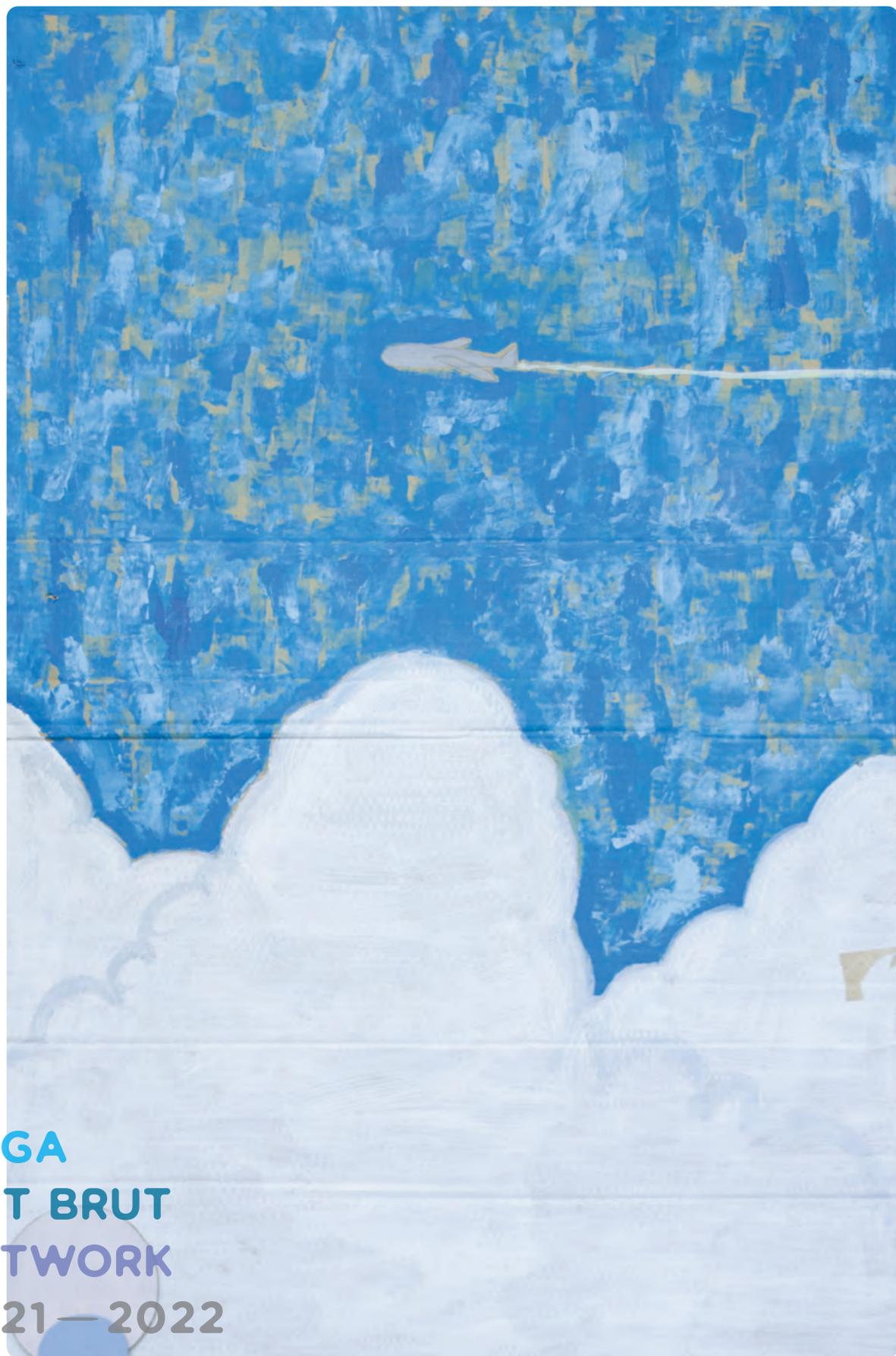


令和3年度佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業報告書



SAGA
ART BRUT
NETWORK
2021—2022



社会福祉法人はる

「私たちの願いは、障がいのある人たちが、自分の人生の主人公として、生涯を通して、地域とともに幸せに暮らしてもらうことです」という理念のもと、子どもから大人まで、生涯を通して地域で暮らすことができる体制を作ること、また、仕事や様々な活動を通して地域の方たちと触れ合ったり、協働することで、障がいのある人たちの生活が豊かになり、地域の理解も深まる活動に力を入れています。



SANCは佐賀県において障がいのある人たちの芸術活動の輪が広がっていくことを目指し、芸術活動に取り組んでいる障がいのある方、支援をしている方、関心のある方を主な対象として、「相談対応」「人材育成」「創作・発表機会の創出」「ネットワーク作り」「拠点の運営」などを行っています。
本書では令和3年度に取り組んだことをご紹介します。

目次

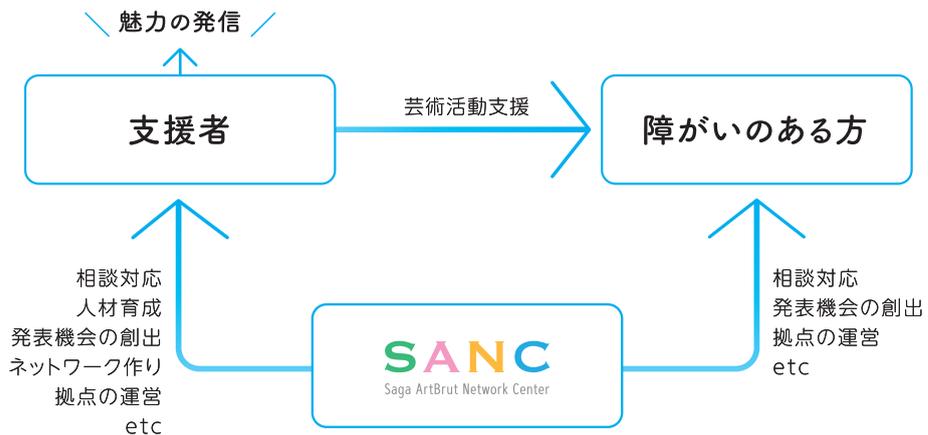
- 3 SANCについて
- 4 令和3年度にSANCが取り組んだこと
- 6 創作体験ワークショップ
- 10 みんなでつくる なんでもステージ
- 14 障がいのある方の創作活動にまつわる 権利擁護について
- 16 がばいアーティストたち展を一緒に作りませんか？
- 18 がばいアーティストたち これ誰が描いたの？ vol.4
- 24 第5回 スター発掘プロジェクト in 佐賀
- 30 佐賀大学芸術地域デザイン学部 地域創生フィールドワーク「障害とアート」
- 32 ゆつつらアートデイ
- 34 相談支援
- 35 さまざまな連携
- 36 SANCのご案内
- 38 おわりに

SANC(サンク)について

2015年8月、社会福祉法人はるは、厚生労働省「障害者の芸術活動支援モデル事業」の助成を受け、障がいのある方が芸術活動を通じて豊かに生活できる社会を目指して、“SANC (Saga ArtBrut Network Center)” をオープンしました。

2018年からは「佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業」の支援センターとして、その活動を継続し、佐賀県において芸術活動に取り組んでいる障がいのある方、支援者の方、関心のある方などを対象に、「人材育成」「相談対応」「機会創出」「ネットワーク作り」「拠点運営」など、障がいのある方の芸術活動普及支援のための、さまざまな取り組みを行なっています。

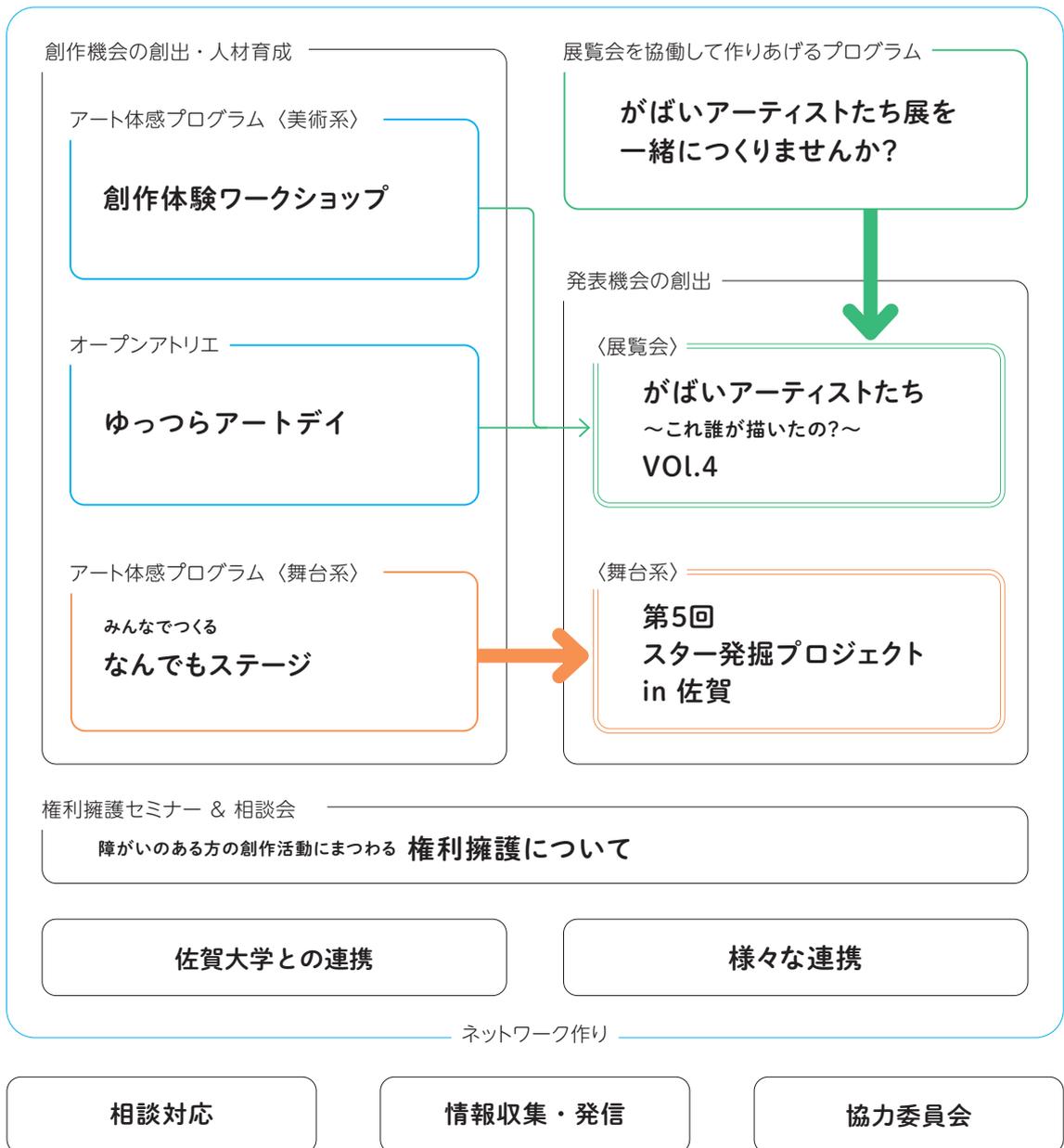
障がいのある方の芸術活動を支えるために



SANCは、障がいのある方の芸術活動を支援されている方たちへのサポートを軸として活動しています。その取り組みを通じて、障がいのある方と芸術活動を共に楽しみ、その魅力を世の中に届けてくださる“支援者（サポーター）”が増えることで、障がいのある方が芸術活動に取り組みやすい環境を広げていきます。

令和3年度に SANC が取り組んだこと

今年度、SANCは障がいのある方が芸術活動に取り組みやすい環境作りのために、県内の広い範囲(12箇所)で、機会創出につながる2つのワークショップを開催しました。また、同時に「芸術活動に関心はあるが、取り組んでいない」事業所や支援者の方が芸術活動の“一歩目を踏み出す”ためのサポートと、作者や支援者、障がいのある人のアートに関心のある人など“ネットワーク作り”に重点を置いて活動しました。

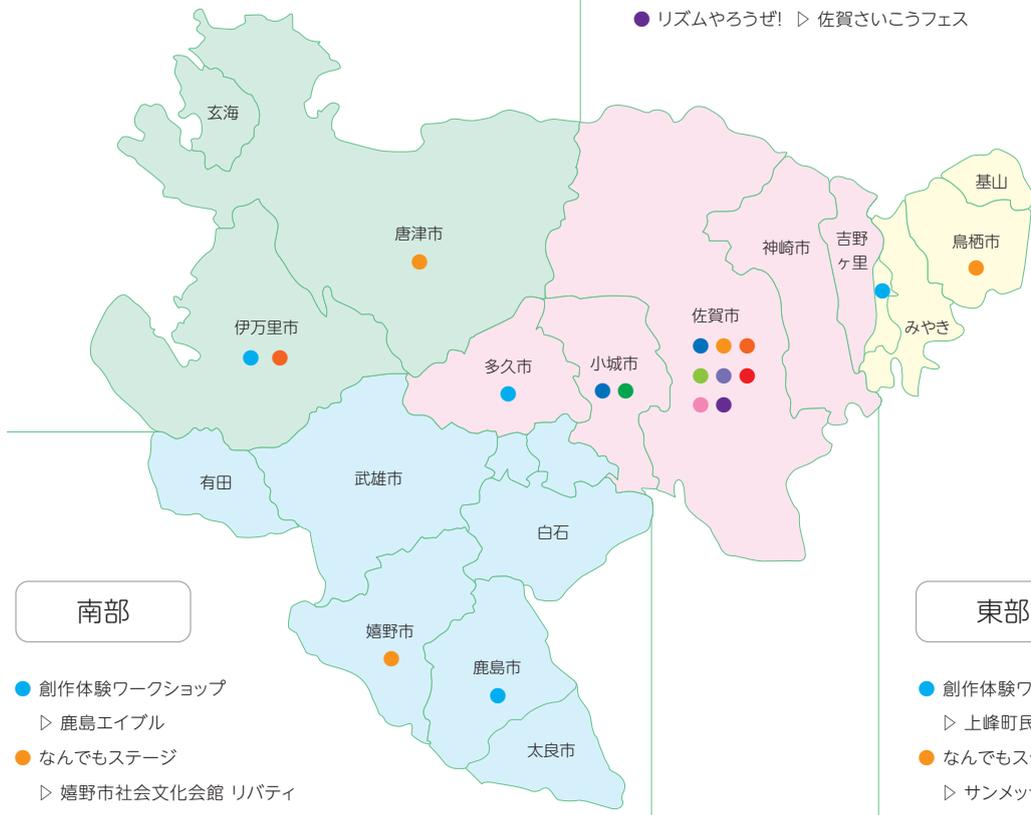


北部・西部

- 創作体験ワークショップ ▷ 伊万里市民センター
- なんでもステージ ▷ 相知交流文化センター
- 出張版 なんでもステージ ▷ 障害福祉事業所 にこにこいまり

中部

- 創作体験ワークショップ ▷ あいぱれっと
- 出張版 創作体験ワークショップ ▷ Gombo
- 出張版 創作体験ワークショップ ▷ ジョインハート川副
- なんでもステージ ▷ ほほえみ館
- 出張版 なんでもステージ ▷ ライフサポートはる
- 「がばいアーティストたち展を作りませんか？」
▷ アトリエ・サンク
- 権利擁護セミナー&相談会 ▷ アトリエ・サンク
- がばいアーティストたち vol.4 ▷ ゆめぶらっと小城
- 第5回 スター発掘プロジェクト ▷ アバンセホール
- ゆつつらアートデイ（通年）▷ アトリエ・サンク
- リズムやろうぜ! ▷ 佐賀さいこうフェス



南部

- 創作体験ワークショップ
▷ 鹿島エイブル
- なんでもステージ
▷ 嬉野市社会文化会館 リバティ

東部

- 創作体験ワークショップ
▷ 上峰町民センター
- なんでもステージ
▷ サンメッセ鳥栖

オンライン(Zoom)と、対面(アトリエ・サンク)併用開催

- 「がばいアーティストたち展を作りませんか？」
- 権利擁護セミナー&相談会
- 第5回 スター発掘プロジェクト（動画上映の部）

創作体験ワークショップ

「アートに興味はあるけど、どういふふう支援すればいいのかわからない」
「アートの楽しさに触れてみたい」「もっといろいろな素材を使って、自由に表現してみたい」
誰でも楽しく参加できて、創作活動で使える道具や支援の視点も学べるワークショップです。

機会創出 # 人材育成 # ネットワーク作り # 文化芸術へのアクセシビリティ向上



令和3年度 佐賀県障害者福祉推進事業 文化芸術推進事業
アート体感プログラム
創作体験ワークショップ

アートに触れたいけど、何をしたらいいかわからない、どう支援すればいいかわからない、そんな悩みは、ぜひ体験してください。

9-26	11-6
10-9	11-28

12月12日(日) 12月12日(日)

講師 大江 登美子氏 (画家 / 佐賀女子短期大学 こども未来学科准教授)

- 【三養基会場】上峰町民センター／令和3年9月26日(火)
- 【多久会場】あいぱれっと／令和3年10月9日(土)
- 【伊万里会場】伊万里市民センター／令和3年11月6日(土)
- 【鹿島会場】鹿島市生涯学習センターエイブル／令和3年11月28日(日)
- 【事業所出張版】生活介護事業所 Gombo (小城市)
- 【事業所出張版】障がい福祉サービス事業所 ジョインハート川副 (佐賀市)



「はーとあーと倶楽部」での活動をはじめ、障がいのある方との造形活動に多く取り組んでいる画家の大江登美子さんを講師にお呼びして、創作活動の第一歩を踏み出すワークショップを開催しました。

さまざまな画材や素材に触れて、自由な創作のワクワク感を味わいながら、自宅や事業所でアート活動をする際に必要な視点や、具体的な支援方法などを感覚的に学びました。



参加者アンケートより

①参加の理由 ②感想

①施設の利用者さんの創作活動のヒントが欲しかったから

②いろんなものを使って絵が描ける経験をさせてもらい、絵が苦手な私でも楽しく参加することができました。施設に帰ってから、他の利用者さんにも絵を描いてみましょうと言ってみたいと思います。



①(施設の)余暇活動にアートを取り入れたいと思っていたので、何かヒントがいただければと思って。

②余暇活動に重点を置いていたが、体験して利用者様の理解(ノンバーバル)という視点、感覚としてのアートという視点を知ることができた。絵が下手でも楽しかった。学生時代は辛かったので。



①ぜひ大江先生のアート指導を受けてみたいと念願かないました。(支援の中でどうしたら良いか?があったので)

②支援をさせていただいているお子さんののびのびとした作品制作が見れてとても嬉しいと思っております。とても励みになりました。また参加させていただきます!



①このようなイベントがあればいいのにとずっと思っていたのです。(画材のことなどちょっと専門的な)
②絵の具を塗っている時間、開放的になれました。またこのようなイベントがあれば参加したいですし、出張もしていただきたいです。



①自由に絵を描くワークショップに参加してみたかった。大江先生のワークショップに興味があった。
②「保護者さんも描いてみてください」と言われて下地を描くと、とても楽しかった。私も自由になりました。たくさんの画材にふれあうのもすてきな時間です。



①自分も福祉施設で絵を描いたり教えたりしたい。
②色んな画材や道具を使うこと、その可能性！楽しさ！画材など揃えるのが(経済的に)大変かなと思いますが、まずはあるものから使っていきたいです。



①子どもが興味があった。
②普段、自宅では出来ないような体験ありがとうございました。色んな画材も知ることができ、未知の世界だったアートのことを少し広げることができたかなと思います。

①子供たちの体験活動として
②障害・年齢に関係なしに参加して取り組めてよかった。

①絵が得意な息子がさらにアートに興味を持つきっかけになればと思った。
②学校では限られた時間の中で完成させなければならないので、せっかく丁寧にかけた下描きが台無しになることが多いです。今日のはんびりと時間があって良かったです。



「創作体験ワークショップ」を 振り返って

今年度は佐賀県内6か所で実施しましたので、県内の広い地域から、さまざまな立場の方に参加していただくことができたのではないのでしょうか。描いたり作ったりすることが好き・興味がある方、絵の具を触るのは中学校以来だという方、支援の方法を拡げたいという思いがある方などなど。

ワークショップの内容は昨年度と同じように、アクリル絵の具を中心に、筆の他にローラーやスポンジスタンプ、たわしや割り箸など身近な生活用具も使ってみて、絵画表現を楽しんでいただきました。キャンバスやパネルや画用紙に絵の具をつけてみる感触を味わったり、色の混ざり合いを試したり、用具によって絵の具が見せてくれる様々な表情の違いを発見したり。このような行為に、楽しみや喜びを発見すること。そこに現れた新しい自分に出会うこと。そのような出会いを大切にしたい、愛おしくありたい。それを多くの人と分かち合いたい。このワークショッ

プはそんな気持ちを持ち帰っていただくことを目指して実施しました。

参加された方からは、表現活動の続きに取り組まれたり、今後の支援方法を模索されたり、新しい支援に取り組まれたりと、嬉しい事後報告をいただきました。

一方で、課題も見つけることができました。重く受け止めたのは、まずこのような機会を得ることに難しさがあるというご意見です。支援者や資金、場所の確保に加え、活動場所への移動に対する難しさについて教えていただきました。次年度以降の方向性について、これらの視点は大変重要だと考えます。

人間が幸せに生きるためには、衣食住のみならず、文化芸術へのまなざしを忘れてはなりません。空気を吸う、ご飯を食べるのと同じくらいに大切なこと。そのことを忘れなければ、世界は本当の意味で平和になる。そのために行えることを問い続けたいと思います。

大江 登美子（画家 / 佐賀女子短期大学 こども未来学科准教授）

みんなでつくる なんでもステージ

だれでも楽しく参加できるパフォーマンスのワークショップ & なんでもステージ。
身体を動かすワークショップや、みんなでつくる小さなステージを通して、
その人が持っている魅力をさらに輝かせるためのヒントを学びます。

機会創出 # 人材育成 # ネットワーク作り # 文化芸術へのアクセシビリティ向上



講師 小松原 修氏 (ドラマディレクター/佐賀大学)

【唐津会場】相模交流文化センター/令和3年10月10日(日)

【佐賀会場】ほほえみ館/令和3年10月31日(日)

【嬉野会場】嬉野市社会文化会館リパティ/令和3年10月31日(日)

【鳥栖会場】サンメッセ鳥栖/令和3年12月4日(土)

【事業所出張版】障害福祉サービス事業所 にこにこいまり(伊万里市)

【事業所出張版】生活介護事業所 ライフサポートはる(佐賀市)



障がいのある人とのさまざまなパフォーマンス活動に20年以上携わり、自身も劇役者として活躍する小松原修さん(ドラマディレクター/佐賀大学)を講師に、身体を動かすワークショップに加え、「発表」の要素を取り入れた「なんでもステージ」を、県内の4つの地域の公共施設、および2つの事業所で開催しました。

障がいのある方やご家族、福祉の支援者、関心のある方など計45名が参加し、身体を動かしながら緊張をほぐすワークショップや、パフォーマーと観客みんなで作る自由なステージ発表を通して、だれでも楽しく参加し交流できるパフォーマンスの魅力を共有しました。

参加者アンケートより

①参加の理由 ②感想

①色んな方と、様々な表現方法を通じて繋がりがかった。

②少しずつみんなの緊張がとれていくのがわかって楽しかったです。とても充実していました。

参加者みんなで作りに上げていった感覚があります！

②自身も参加することで、同じ空気感を感じ緊張感がやわらいだ。一人一人の自己紹介で親近感もわき、パフォーマンスが楽しめた。

自由に表現することの難しさは誰でも同じ。すてきなワークショップで、機会がどんどん増えると良いと思う。

①面白そうだった。コロナで部活が無くなって体が鈍ったのでイベントに参加して、あまり人前で踊れないのと、自信がもてるかと思って。

②人の前に出て緊張はするけど、みんなを笑顔にするのは良いことだと気づいた。人の前で自信を持って踊ることが苦手なところがあって、自分が好きなダンスを踊るのに自信を持てた。

出張版「なんでもステージ」感想より

障害福祉サービス事業所 にこにこいまり

○年齢や障害の種別・度合い等々、関わりなく、それぞれに楽しく参加することができました。

音楽への取り組みも、身体を動かすことも、色々な手立てがあるということ、改めて感じました。ご指導・ご紹介くださった誰にもできることで、みんなの「やる気」をも引き出し、次に繋げることができると感じました。指導者がいないからやれない、時間がないからやれないではなく、今の状況でやれることを少しでも実行していきたいと思います。



生活介護事業所ライフサポートはる

○ 計画の段階では実際のイメージをつかむのが難しかった。実際やってみて、楽しく、小松原さんの語りがすばらしかった。利用者様の一人一人の今までと違った表情や行動ををたくさん見ることができました。自分たちでまたワークショップを行いたいと思っています。また一人一人の利用者様のできることや、表出したいことを、日々を通して見つけていきたいと思いました。

○ 新たな発見が見れてとても良い機会でした。普段から利用者さんがやっていることや動きをもっと観察することで、もっと良いものになると思います。一見、支援者として困ったなという利用者さんの行動にも目を向けられて、そのものが良いよねという見方にがらっと変わりうる可能性があり、関わっている人が「おもしろい」という視点になっているなど感じます。支援者としても可能性を狭めてしまっていたなと、振り返る良い機会になりました。また、機会があればやってみたいです。どんどんアップデートしていきたいです。



「なんでもステージ」を振り返って

今年度は、特に障害当事者の方々に参加してもらえるようなワークショップにするようにしました。当事者が満足し、さらには身体表現（以下パフォーマンス）を継続してもらうために、「スター発掘プロジェクト」の枠組みをそのまま使うようにして、観客の前で思いっきりパフォーマンスしてもらう時間を多く取るようにしました。内容だけでなく、広報も工夫しました。チラシには、平易な言葉を用いて、イラストを多く使い、ワークショップの名前もイメージしやすいものにしました。結果的には、課題も何とかクリアできたのですが、やはり当事者が地域のイベントに家族などの支援がなく単独で来ることはどのイベントでも同じ課題だと感じます。

今回は、加えて福祉事業所でのアウトリーチ型のワークショップも2件、開催しました。そのうちの一件の所長さんから頂いた言葉が現状の課題を表しているように感じました。「魅力的な催しがあっても、家族がそこに同行して参加するだけのエネルギーがなかなか生まれてこない。これは家族側の課題なのですが、こう

やって、事業所内で体験できるような機会を作ってもらえると、そこから地域への参加に繋がりがやすい」と。

県内の多くの事業所には、絵を描くことも音楽を奏でることもそんなに関心がなく、アートとは程遠いと感じてしまう障害のある方々はたくさんいらっしゃるかもしれません。

今年、事業所内で開催したワークショップの中で、人差し指で頬をポンポンと鳴らすというパフォーマンスが、これまで障害のある人のパフォーマンスを見たことがない方の心を揺さぶりました。何気なくしている仕草や繰り返し行われる行為が、時にパフォーマンスへと昇華し、決して少なくない人たちの心を揺さぶることがあります。

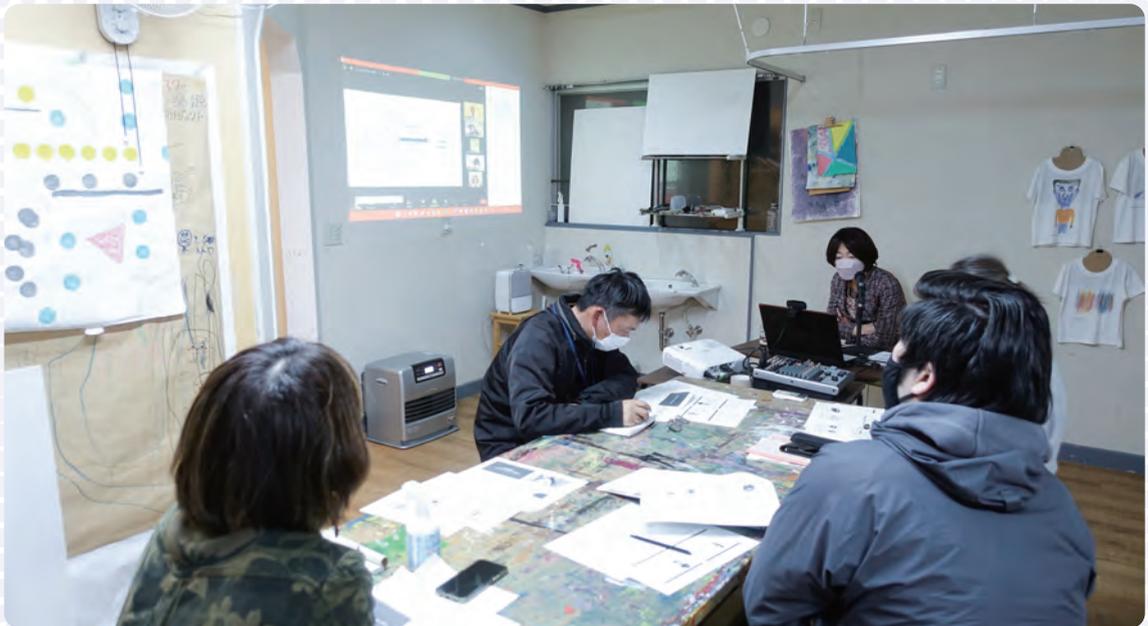
アールブリュットという潮流の中で、これまで見過ごされてきた作品への価値が一気に高まるということがよく見受けられますが、パフォーマンスも同じことが起こりうるのだと感じます。そんなパフォーマンスと出会えるような機会をこれからも作っていかれたらと思います。

小松原 修（ドラマディレクター／佐賀大学）

障がいのある方の創作活動にまつわる 権利擁護について

作者の権利を護りながら、安心して作品を取り扱うために必要なこと。
“法律”と“アート”の分野で、専門的な知識をもつ2名の講師による
〔基礎講義／事例紹介／質問・相談〕を通して、
「創作活動にまつわる権利擁護」の基本的な知識や考え方を身につけます。

人材育成 # 権利擁護 # 作品の二次利用 # 作品の販売 # ネットワーク作り



障がいのある方たちの作品を展示するとき、販売するとき、グッズ化するとき、作者の権利をどのように考え、護っていけばよいでしょうか。

2名の講師による「基礎講義／事例紹介／質問・相談コーナー」を通して、障がいのある作者の権利を護りながら、安心して作品を取り扱っていく上で必要となる知識と、状況に応じた考え方を学びました。

講師 安永 恵子氏 (弁護士／安永法律事務所)

樋口 龍二氏 (NPO 法人まる)

【会場・日時】 オンライン (Zoom) + アトリエ・サンク / 令和4年2月25日 (金)

相談事例より

Q. 事業所の職員です。利用者の方にLINEスタンプを作ってもらっており、事業所の名前でリリースしようと思っていますが、権利的に大丈夫でしょうか？

A. スタンプ制作を始める前に、作家個人として出すのか、あるいは事業所の名前で出すのか、また、販売による収益が100% 作者に入るのか、そうでなければ何パーセントが作者に入るのかなど、本人とちゃんと話し合って決めましょう。

契約については、相手が法人であれ個人であれ、基本的なルールに従って書面を交わして作者本人との契約をする必要があります。その上で、お互いの合意が取れればLINEスタンプを製作する、どちらかが納得いかない場合はLINEスタンプは製作しない、という判断になります。(樋口氏)

Q. 病院の職員です。過去に当院に入院されて、すでに亡くなられた方の作品について、過去に院内で展示したり論文等にて発表する際に、ご本人およびご家族から使用の承諾を得ています。その方の作品の画像を、例えば別の本に掲載したり、当院のホームページで紹介したりすることは可能でしょうか。著作権は病院にあると考えていいでしょうか。亡くなられてすでに10年経っており、ご家族との連絡は取れない状態です。

A. 著作者がお亡くなりになられてから70年間は著作権が保護されるので、その期間内であれば、著作権の承諾について考える必要があります。以前受けたというその承諾が、今後の使用についても包括的に承諾するものであれば、新たに写真を掲載することは可能ですが、過去に得た承諾がその時限りのものであれば、別の用途に使用する承諾が得られていないことになり、複製権・公衆送信権の問題が生じます。

ただ、絵画や写真などの著作物を公に展示する場合、それらの作品を解説・紹介をすることを目的とし

た小冊子への掲載については、基本的に権利者の承諾を受ける必要はありません。

なお、ご家族や権利者との連絡が取れない場合でも、同じく権利を尊重する必要があり、連絡が取れないからといって、好きに使っていいということはありません。明確な承諾を受けていないのであれば、承諾を受けた範囲外での使用は避けたほうが無難でしょう。

(安永氏)

参加者アンケートより

①参加の理由 ②感想

①今年度より生活介護での絵画活動を始めました。展示会で原画をお買い求めいただいたことをきっかけに、お金にまつわる流れを整える必要があることを知りました

②お二方のお話はとても分かりやすく、今後、当法人でもしっかり取り入れて整備していくことで、利用者さんの権利擁護につながることを実感でき、とても良かったです。アートのことを少し広げることができたかなと思います。

①関心があるテーマだった。

②アート活動をしているある福祉事業所で、利用者さんたちの間で販売価格に差をつけない、という話を聞きました。福祉の現場に競争を持ち込みたくないということでした。その考えに共感する一方、作家としての権利はあるように思い、どう考えたらいいかと悶々としてきました。今回のイベントで、少しヒントが見つかったような気がします。

②今まで、何も考えずに作品を描いてもらっていました。今後は、作品を販売するときに、本人との契約を考えていきたいです。

「がばいアーティストたち」展を一緒に作りませんか？

紹介したい作者がいる、作品を発信するスキルを身に付けたい
この人が持っているステキなところを、何とかして伝えたい
既存の枠を超えて、より広く作品を届けたい —— そんな思いをかたちにしましょう。

人材育成 # 発表機会の創出 # ネットワーク作り # 展覧会をつくるプロセス



アドバイザー 花田 伸一氏 (キュレーター / 佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授)

- ①「作品を持ち寄って見せ合おう」 日時：令和3年9月10日(金)
- ②「会場検討(1)」 日時：令和3年9月24日(金)
- ③「展示方法を考えよう」 日時：令和3年10月1日(金)
- ④「会場検討(2)」 日時：令和3年10月29日(金)
- ⑤「作品選出」 日時：令和3年11月16日(火)
- ⑥「展示準備を整えよう」 日時：令和3年11月19日(金)



展覧会『がばいアーティストたち』展の開催に向けて、障がいのある作者の保護者や福祉施設職員、作者本人などからなる“展覧会実行委員会”を組織。21名の実行委員会メンバーがアイデアや思いを出し合いながら、展覧会づくりに取り組みました。

実行委員会メンバーが集まる全5回の会議では、それぞれ持ち寄った作品の紹介から会場探し、「なにを/だれに/どのように見てほしいのか？」といった想いの共有、具体的な関連企画の提案などを通して、展覧会についてさまざまな視点から話し合い、展覧会の内容をつくり上げていきました。

また、実行委員会メンバーは、会議の他にも、専門的な知識を持ったアドバイザーらによる作品選出会

への参加や、作家紹介文の執筆、告知方法の検討、会場での展示作業や来場者案内など、さまざまな活動への参加を通して、芸術活動の発信にかかわるスキルアップと参加者同士のネットワーク形成を目指しました。

前年度に引き続き、オンラインでの会議参加、および出展ができるようにした他、令和3年度は新たに「リアルタイムな意見共有の場としてメッセージアプリの導入」「メインの会議とは別に、少しカジュアルな会合の実施」「参加者主導による関連企画実施の後押し」など、実行委員会メンバーがよりフレキシブルに動きやすい環境づくりの工夫を取り入れ、メンバーのさらなる発信スキル向上および継続的な参加者同士のネットワークの形成を目指しました。

がばい アーティストたち

これだれが描いたの？

アートとしか言いようのないものをTシャツにしてみました。

vol.

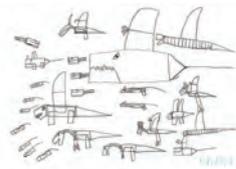
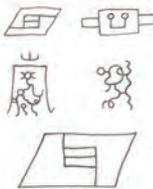
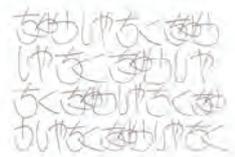
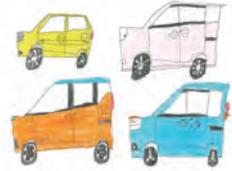
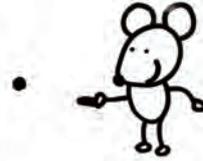
「Tシャツをキャンバスに」をコンセプトとした展覧会『がばいアーティストたち』展。4年目となる今年は、「ゆめぷらっと小城」を会場に、佐賀県周辺に住むアーティスト 30名による39点の造形作品を“作品実物”と“Tシャツ”の2パターンで展示しました。

発表機会創出 # 人材育成 # ネットワーク作り

【会場】小城市まちなか市民交流プラザ「ゆめぷらっと小城」

【会期】令和4年1月15日(土)～1月23日(日)







「がばいアーティストたち」展会場では、実行委員会メンバーの協働によって、出展作家らによる公開制作&ワークショップの実施 / Tシャツ型の紙にイラストやコメントを描いて吊り下げるメッセージボード「がばいの木」の設置 / 「がばいアーティストたちテーマソングの映像上映とライブ演奏 / 出展作家によるオンラインツアーなど、さまざまな関連企画が実現し、会場を盛り上げました。また、会期を通して「お絵描きスペース(出張版ゆっつらアートデイ)」の設置、展示Tシャツの受注販売、展示作品のポストカード販売などを行いました。

※Tシャツ、ポストカード販売による利益は全て出展作家に還元されます。





来場者アンケートより

○ もしかしたら、見過ごされてしまうかもしれない
そんな作品に光があてられ当事者に寄り添う方々を通じて、生命を吹き込まれ、輝きを放つ作品となってこの場にいる彼らの奥底に沈んでいた力の数々に出会い、来てよかったと感じさせていただきました。

○ 偶然通りかかったのですが、吸い寄せられるように展示されている作品を拝見しました。
どの作品も素晴らしかったです。また、これらの多様な作品たちを「素敵だね」と認めて下さる人々や社会の温かさを感じ、それが何よりうれしかったです。

○ 作家紹介のキャプションがすてきでした。皆さんがどんな風に活動されているんだろう、と興味が湧きます。私も仕事で活かせたらいいなと思います。

○ 色とりどりの様々作品があり、またそれらをTシャツにすることでより芸術を身近に感じられていた。また色々な作品が見てみたいです。

○ 障害を持つ人と、関わる場所をもっと増やして、当たり前のことになりたい。私はダンスの先生でそういうレッスンをしていますが、コロナが落ち着いたらたくさんコラボしたい。また、たのしみにしてます！

○ コロナ禍でこういうイベントも減って心が荒みそうでしたが、どんな思いでこの一筆一画いれたのだろうと考えながらみるのもおもしろかったです。純粋に多様な表現に触れられ、形や色の面白さに触れ、たのしい時間でした。パネルの説明も製作者の方を想像でき、面白かったです。

○ わが子も絵を描くことがすきなので、作者さんがどんなふうに楽しまれて書かれたか想像しただけでほんわりして、気持ちがとても伝わりました。作者さん本人ともオンラインでお話しもできて、絵に対して気持ちが込められていること、テーマカラーがえられること、知れてとても良かったです。

○ 障害を持つ方—障害という言葉がきらいです。仕事上、そういった方たちに触れ合うことがあります。心を開くまでが大変で、開いてもらえれば楽しい。

○ ご本人たちを知っているまたは何かしらかわりがある者として、本当に魂がゆさぶられました。

○ 素晴らしい作品たちに出会えました。これからもっと多くの人や作品をより多くの機会を設けて、いろんな人に知ってもらいたい。

○ 唐津での展覧会お願いします。

「がばいアーティストたち展」

実行委員会による振り返り

○ 昨年は、2人の出展でしたが、今回は、5人出展することができました。利用者の方たちも作品を描く目標となり、楽しみが増えているようです。そして、今回は、マネキンを制作するという大役を担うこととなりました。利用者の方たちが、協力しながら作り、そのマネキンを現地会場で組み立てるといふ、初めての出来事に、皆さんとても緊張されていましたが、「おもしろかった〜」という感想でした。とても貴重な体験をさせていただきました。そして、実行委員会の方たちとの交流も、とても勉強になりました。 (山口 直美)



○ 僕は未来メルヘンの小説を10年以上描き続けて、今までは僕の友だちを中心とした数少ない人にしか読まれていませんでしたが、今回のイベントでは知らない人からも見てもらったり、新しい出会いがあったり、ようやく僕の作品を多くの人に見てもらうチャンスに巡り合えたなぁと感じました。

また僕は今までは小説が中心でしたが、僕が今まで描いた絵や歌った歌にも着目してもらって、僕自身が気付いていなかった小説以外の作品に価値を見出してもらったのも嬉しかったです。 (未来少年)

○ 今年はラインワークスの活用によって、会場の様子の報告や作家さんの来場を喜び合えてよかったと思います。たくさんの作家さんが来場できてホントによかった。 (瀬戸口 庸子)



○ 一概に「アート」といっても絵画に限らず様々な作品があること、また、支援者である我々が利用者さんの才能を如何に開花させ伸ばしていくかが重要である事を学びました。

同時に展覧会開催の意義を改めて感じさせられました。開催までは「如何にプロデュースするか」を意識していましたが、開催後、当事業所の参加利用者に展覧会観覧後より創作意欲の向上がみられた事で、展覧会を開催する事が地域社会には当然のこと、参加者にも多大な影響を与える事を学びました。 (宮崎 仁)



○ 今回、初めて涼太(作者)を連れて行きました。5分程度の観覧でしたが、1度行って、また行きたいという表示を涼太自身がしたので、2度行きました。2度目は、自分の作品の前でしばらく眺めて触ったりしていました。どう感じているのかはわかりませんが、行きたいという表示があったことが最大の収穫でした。去年参加してから、Tシャツを折り紙などでたくさん作っているのも、何かあるのでしょう。涼太にとって、工作が言葉なのをあらためて認識しました。 (椿原 京子)

○ 今年度は、これまでよりも展覧会作りに少し深く関わらせて頂きました。会場探しの事では、条件や会期日が合うところを見つけるのは、とても大変で簡単な事ではありませんでした。

今回は、関連企画にも、関わらせて頂きました。1つの提案を膨らませ、できる範囲で展覧会のイメージを邪魔しない様にと考えました。

初めは、案に出ていた『がばいの木』の企画を実現出来たらと思いき、サンクさんにご相談して、会期日も迫る中でしたが、出来る限りやってみることにしました。

まず、実行委員の皆さんから仲間を集いしましたが、急なお誘いになかなか集まらず、結果、賛同頂いたお二人と、一緒に動く事になりました。サンクさんのご協力や、会場視察や、LINEで細かな作業工程等を決めたり、考えた物を絵に描いて写真で送り合ったりして、手分けして案を練って行きました。ほぼ、やり取りは、LINEだけでしたが、3人の出来る事を出し合い、話し合っ、協力して制作作業日まで、1度も会わずに、こぎつけました。会場での組み立ても、設営に来られた実行委員さんにお手伝い頂き完成させることが出来ました。

通称『がばいミニTシャツの木』は、コロナ禍の中で、来場者とアーティストがお互い会えなくて、コミュニケーションをとることが難しい中で、ダンボールで作ったミニTシャツに、メッセージやイラストなどで来場者が展覧会で、感じたこと、伝えたいことを書いて(描いて)頂いたものが、がばいアーティストさん達の心に届いてくれたらと思いました。

参加型のワークショップの様にすることで、書いて(描いて)楽しい、見て楽しいと思って下さるものを作ったので、

アーティスト × 来場者

アーティスト × アーティストの家族

アーティスト × 実行委員

来場者 × 実行委員

実行委員 × 実行委員

アーティストの家族 × 実行委員

などの、たくさんの心のつながりが生まれたようでした。

この展覧会を通じて、社会参加出来ている現状が、生きづらさを抱えてらっしゃる「がばいアーティストさん」たちにとって、喜びや自信になってくれたと思います。

それに、展覧会を支えた、我々実行委員も同様に、共感出来たと思いました。充実した関わりが出来て、今後の活動に対しても前向きにやっへ行こうと思える自信に繋がる事が、出来たと思います！このような企画に携われ、達成感や充実感でいっぱいです。 (江口 博子)



がばいアーティストたち vol.4 特設サイト

出展作品の画像と作家紹介文をご覧いただけます。

▷ <http://s-brut.net/gabaiartists/>



歌う! 踊る! 奏でる! 演じる!……

パフォーマーと観客が一体となって表現を楽しむ自由なステージ!

障がいがあってもなくても、

人前でパフォーマンスして楽しませたい人、大集合!

第5回

スター発掘プロジェクト

in 佐賀

#発表機会創出 #人材育成 #ネットワーク作り



パフォーマンスの発表機会『スター発掘プロジェクト』。5年目となる今年は、昨年に続き「ステージ発表」とオンラインでの「動画上映」の2部門を用意し、それぞれ日程を分けて開催しました。まず、2月6日(日)、アバンセホールでのステージ発表では、バンド演奏やピアノとダンスのコラボレーション、映画「モアナと伝説の海」を題材とした朗読劇など、12組のパフォーマーが様々なパフォーマンスを披露しました。

2月27日(日)にオンラインとアトリエで開催した「動画上映会」では、オリジナル曲の演奏やダンス披露、画面越しに行う即興演劇など、全国から投稿された10のパフォーマンス動画を、出演者・観客とゲストコメンテーター6名を含む36名で楽しみました。

弁護士や学芸員、デザイナーなどさまざまな分野の専門家が、パフォーマンスへのコメントを行うゲストの「コメンテーター」として参加。「上手」「下手」と

いった画一的な評価ではなく、「ここにインパクトがあった」「自分の専門分野からこのように見え、興味深く感じた」など、一人ひとりのパフォーマーの個性に対してポジティブで多面的な評価を行うことで、監修・総合司会の小松原氏とともに、それぞれの尖ったところを肯定的に捉え、魅力としてさらに引き出すという視点を共有しました。

監修・司会 小松原 修氏 (ドラマディレクター／佐賀大学)

ステージの部

【会場】佐賀県立生涯学習センター アバンセ (ホール)

【日時】令和4年2月6日(日)

動画上映の部

【会場】ZOOM+アトリエ・サンク

【日時】令和4年2月27日(日)





「ステージの部」参加者アンケートより

- とても素敵なものを見て良かったです。みなさんの表現を見て、私も頑張らないかと思いいい機会になりました。もっと「スター発掘プロジェクト」のような機会が増えるといいなと思いました。
- スタートからラストまで、個性ほとばしる発表の連続でお腹いっぱいになりました！
- 参加者の方とのあたたかい交流があり、この会のよさを感じました。

「動画上映の部」参加者アンケートより

- 動画として面白いコンテンツになるものは、生のステージとは違った楽しみ方があると感じました。様々な表現に触れることができ良かったし、自分でも何か表現できることを発信していきたいと感じました。
- 自分を表現することへの想いが溢れている場だと思っています。
- 周りの視線を気にせず自分を信じて進むことが大切だと改めて思いました。





○ 参加作品の幅も広く、すごく面白かったです。そして
 コメンテーターの皆さんのコメントも興味深い内容で
 した。コロナ禍のなかで表現など制限を感じる部分も多
 かったので、演じることも制作することも、そしてみな
 さんの作品を鑑賞したり、コメントや印象をお聞きする
 ことはとても楽しかったです。3時間・とても3時間とは
 思えないほど、あっという間でした。

そして今は、または是非新たな作り物もやってみたいと
 思っています。小松原さんのワークショップもぜひ参加
 したと思います。佐賀なのでオンラインは本当に助かり
 ます。気を失いかけていたような毎日だったので、とて
 も生き返りました。

○ 参加者がかなり充実してきたなと感じました。かつ
 多彩になっており、少しづつこのイベントが佐賀に根付
 いてきていると実感しました。

○ いろいろな方が表現されているのを見て、また、世
 界がひとつ広がりました。

○ みなさん多種多様なパフォーマンスで飽きることな
 く楽しめました。

○ アーカイブを配信して欲しい。





スター発掘プロジェクトを振り返って

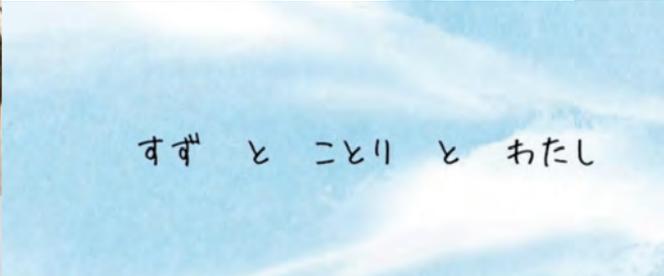
今年度も、実際にステージに立ってパフォーマンスしていただく【ステージの部】と、動画投稿やオンラインでパフォーマンス作品を披露していただく【動画上映の部】の2本立てで行いました。また、2本立て、どちらにもコメントーターが、それぞれのパフォーマンスに、ご自身のお立場（職業など）を踏まえた魅力を高めるコメントを添えていただきました。

今年度、新たに「見えにくい」方にコメントーターをお願いしました。見えにくい、見えないからこそ捉えられる感覚があるのではないかと。通常の身体表現経験者のコメントを2次元と定義するならば、全く違う職業などの立場の方は3次元、「見えにくい」方は4次元に、

それぞれ捉え方感じ方が違うと思いますので、さまざまなパフォーマンスがより多面的に鑑賞・解釈できるようになるのではないかと考えました。

さて、肝心の出演者、【ステージの部】は12組、【オンライン版】も10組と、昨年度以上のエントリー数で、継続してエントリーされている方も多くいらっしゃいました。このプロジェクトを始めた当初、N〇Kのど自慢予選会をイメージしており、どんな表現もウエルカムでしたが、こんなにも発表会という枠を超えた作品が並ぶとは感無量です。

表現は「伝える」ことがフォーカスされがちですが、「受け止めて、感じる、解釈する」という観る側の役割が非常に大きいのではないかとと思うのです。その点では、観る側に委ねる作品のバラエティの豊富さが何とも魅力的で今後の展開がとても楽しみです。



「動画上映の部」に集まった作品より

ただ一つ残念なのは、このイベントが年度末にしか行われれないということで、ビジュアルであれば作品展は時期に関わらず催されておりますが、パフォーマンスとなると、何だか「せーの」という気合いがやや必要になっているように感じます。

来年度、動画配信番組なるものを初動し、そこでパフォーマンス作品の投稿、そして障害のある当事者がコメンテーターにもなるような取り組みの延長に、このスター発掘プロジェクトが展開できればと願っております。そうなれば、パフォーマンスも日常性を帯び、日常と非日常の境を行ったり来たりできるようになる、そんなアートになりそうな予感がしております。

小松原 修 (ドラマディレクター／佐賀大学)

第5回 スター発掘プロジェクト in 佐賀 出演者

【ステージの部】

未来少年バンド / ムッチー / ドッグワープ
Project-R / 応援ヒーロープロジェクト
あやな / Tommy / THE FUZOKU STARS
ラヴゆっつら / ドッチモドッチ
山崎悠希とモアナきらきら隊 / フーミン

【動画投稿の部】

SONOKO / Tani&dreamers / 未来少年
ライフサポートはる / ウゴクカラダ / ムッチー
TipWop / 西村喜浩 / 久保進 / そのしゅん

佐賀大学芸術地域デザイン学部 地域創生フィールドワーク

「障害とアート」

「芸術」と「地域」をフィールドとする佐賀大学の学生8名が、約1年間「表現」を通してさまざまな形で障がいのある人たちとかわり、「障害とアート」への理解を深めました。

#人材育成 #ネットワーク作り #機会創出



「みんなで描くワークショップ」

【見学・調査】県内の生活介護事業所や入所施設、アートを専門とする福祉事業所の見学、障がいのあるアーティストへの取材などを通して、障がいのある人たちや彼らを取り巻く環境に触れ、「障害」と「アート」の結びつきについて考えました。

【みんなで描くワークショップ】2021年10月、佐賀大学芸術地域デザイン学部ミクストメディア室を一日貸し切って「みんなで描くワークショップ」を開催。当日は佐賀大学学生や障がいのある方、保護者、支援者など40名程度が参加し、大きな紙の上で自由に絵を描いて楽しみました。

【成果発表】上記のような活動を通して経験したことをもとに、「障がいという言葉から一度離れてみて、自分たちが純粹にすごいと思った人たち」をテーマに冊子を製作し、成果発表とすることを決定。翌年3月に、佐賀市を拠点に活動する5組のアーティストを紹介する冊子『bb -ダブルフラット-』を完成させ、市内のアートスポットや関係各所等で配布しました。

『bb -ダブルフラット-』
デジタルブックを公開しています。
▷ <https://bit.ly/37iewzG>





「bb -ダブルフラット-」誌面より転載

「bb -ダブルフラット-」編集後記より

今回この雑誌を手掛けた私たちは、「障がいとアート」をテーマにSANCさんのご協力もいただきながら、2021年4月16日より活動を行ってまいりました。活動を始めた当初は活動のための足がかりを掴むため、GENIUSさんや、それいゆさん、脊振学園さんなど佐賀県にある様々な支援施設を見学させて頂きました。また、SANCさんが開催する「ゆつらアートデイ」にメンバーが参加させてもらうこともありました。

こうした様々な手助けやご協力のもと行うことができた活動は、私たちが今後どういった活動を行いたいのかを見据えるための重要な経験であったと考えています。また、コロナ禍にも関わらず快く受け入れてくださった施設の方々には深く感謝しております。

そうして、全ての見学を終えて新しく活動を計画する頃、私たちは『障がいの有無に関わらず、フラットな関係でお互いが個性を出せる』ことを目標として意識していました。それは自分たちの活動の中に限った話ではありません。地域の中、社会の中にまでこの意識を広げることができないかと考えていたのです。しか

しそれは簡単に達成できることではありません。だからこそ、今までの経験や考えをどう形にするのか、目標と食い違っていないか何度も話し合い、出した答えがこの「雑誌」という形でした。

障がいという言葉から離れ、自分たちが純粋に尊敬できると思った佐賀市のアーティストを紹介する雑誌を作ろうと意見がまとまったのです。また、雑誌という形にすることで、アートと関係がないように思われる場所からアートへと人々を繋ぐ役割も担うことができるのではないかと考えました。

この雑誌によってどれくらいの意識や先入観がひっくり返るのかまだ予測はつきません。ただ、この雑誌を読んだときに感じた純粋な感動や尊敬、その在り方に気付くきっかけになればと思います。

【令和3年度「障害とアート」メンバー】

宇野 のどか / 大部 菜々 / 酒井 淳子 / 末武 葉 / 高江 昼豊
 嶋 莉々花 / 檜本 好汰 / 丹羽 奨 / 森田 佳琳

ゆつつらアートデイ

障がいの有る無しに関わらず、だれでも気兼ねなく集い、
自由に創作活動ができるアトリエ・サンク
月に一度のオープンアトリエ「ゆつつらアートデイ」

機会創出 # 人材育成 # ネットワーク作り # 文化芸術へのアクセシビリティ向上



月に一度の「ゆつつらアートデイ」は、自宅や事業所等でなかなか創作活動を行えない方、普段のライフサイクルでは創作活動が難しい方、汚れることを心配をせずに思いぎり描きたい方などが、気兼ねなく集え、安心して創作活動に取り組んでいただくための1日です。

「ゆつつらアートデイ」では、絵の具や色鉛筆、クレヨン、毛筆、粘土など各種画材の貸し出しも行っていきますので、手ぶらでお越しいただいても、創作活動を

楽しんでいただけます。

令和3年度は「完全予約制」「参加者のブロック分け」など、新型コロナウイルス感染症予防対策を整え、計10回開催し、約120名の方にご利用いただきました。

参加・見学については、ご利用案内(p.37)をご参照ください。



参加者アンケートより

○ 色を塗ったり混ぜたり切ったり貼ったり、楽しんでいます。好きなだけ画材などを使えるので自由に楽しそうです。やりたいことを考える力がついたと思います。

○ イライラしていても「ゆっつらアートデイ」に参加すると、すっとなるようで、落ち着くことができます。ひとりでお絵描きすることが増えています。

○ 「ゆっつらアートデイ」に参加している人の方と対話する機会が増えてきました。話しかけたり、話しかけられたりと。時間に関係なく絵の制作に没頭しやすくなりました。

○ 絵を描く頻度が増えました。そのため余暇時間が充実したように思えます。集中する時間も長くなりました。

○ 表現方法の一つとして想いを伝えてほしい。絵を描くことでストレス発散が少しでも出来ればと思います。

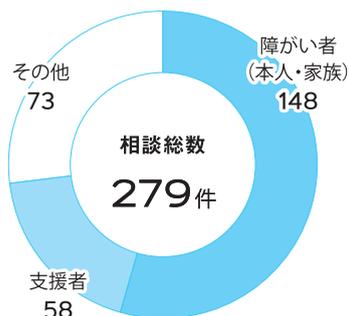
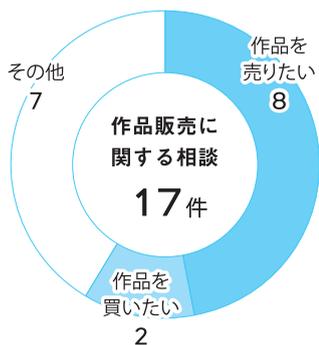
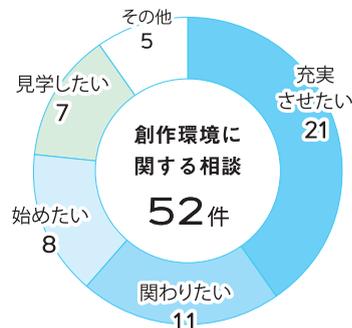
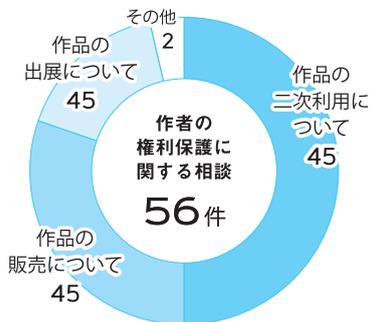
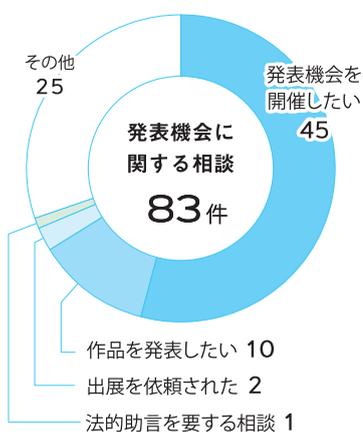
○ 自由にできるのは楽しそう。熱中している

○ 1人で過ごせる時間が増えたり、他の方たちと触れ合うことができること。アート活動があるといつもとと同じように過ごせる。



相談対応

SANCでは、相談窓口を設け、創作活動の支援方法、作者の権利擁護、展覧会の開催や出展に関することなど、障がいのある方の芸術活動に関わるさまざまな質問を受け付けています。お気軽にお問い合わせください



【相談例】

発表機会に関する相談

- 個展を開きたいと思っている。どんな内容にするか相談したい。
- 個展を案内するため DM を作りたい。

作者の権利保護に関する相談

- 利用者さんの作品を使ったポストカードと絵本を作りたい。
- 作品の二次利用等の意思確認について。

創作環境に関する相談

- 娘の所属事業所で創作ワークショップしてほしい。
- みんなで大きな絵を制作し手みたい。

作品販売に関する相談

- 創作活動を仕事に繋げる方法を探している。
- 作品を購入したいと相談を受けたので、販売価格を相談したい。

様々な連携



佐賀さいこうフェス2021 (佐賀県文化課)
アートマーケットにブースを出展。NPO 法人らいふステージと協力し、楽器作りと演奏のワークショップ「リズムやろうぜ!」を行いました。



障がい者文化芸術作品展 (佐賀県文化課)
チラシのデザインに使用する作者・作品を推薦及び、「Fuco:」特別展示コーナーの作品選出・設営に協力しました。



関係するアート展 (佐賀県文化課)
「関係するアート展」に出展団体の一つとして参加。佐賀在住の作家、江副華里さん、加茂賢一さんの作品を出展しました。



パートナーデーメッセージカード (佐賀市)
佐賀市制定「パートナーデー」啓発のためのメッセージカード作家・作品紹介、及びカードのデザイン制作を行いました。



がばいアーティストたち巡回展 (三瀬パール牧場 どんぐり村)
どんぐり村での「がばいアーティストたち vol.4」のTシャツ展示に協力。出展作家によるイベントやワークショップも実施されました。



「どんぐりの樹の下で」 (三瀬パール牧場 どんぐり村)
障害のあるなしに関わらず多様なアーティストが出演する小さな音楽会「どんぐりの樹の下で」の開催に協力しました。

ご相談
承ります。

障がいのある方の芸術活動に関すること、
「こんなことやってみたいんだけど…」など、
お気軽にご相談ください。

SANCでは、相談窓口を設け、創作活動の支援方法、作者の権利擁護、展覧会への出展など、障がいのある方の芸術活動に関するさまざまなご相談・ご質問を受け付けています。まずはお気軽にお問い合わせください。

ご
相
談
例

- ・施設でアート活動を始めたいのですが、何から始めたら？
- ・作品を発表したいのですが、良い方法はありますか？
- ・アート活動を行っている事業所を教えてください。
- ・絵画作品を、チラシやパンフレットなどに使えますか？
- ・作家さんを紹介して欲しい。



アートを通じて、色々な人とつながりたい。

障がいのある方の芸術活動に関わるネットワークの形成と充実を目指して、障がいのある方・支援者・関心のある方などさまざまな方々が出会い、交流や情報交換を行うことができる機会づくりに取り組んでいます。



研修・ワークショップに参加したい。

参加者の協働により展覧会を作り上げる研修、創作体験や身体表現のワークショップなど芸術活動の支援のヒントにいただける機会にご活用ください。

アトリエで創作したい、体験してみたい。

アトリエ・サンクでは、障がいのあるなしに関わらず、気兼ねなく集い自由に創作活動ができる場として、毎月1度のフリーオープン日「ゆつつらアートデイ」を開催しています。創作体験や見学も常時受け付けています。

障がいのあるなしに関わらず、自由に創作活動ができる日

ゆつつらアートデイ

ご利用例

- ・創作体験してみたい方
- ・普段の暮らしの中で創作活動が難しい方
- ・汚れる心配をせずに思いっきり描きたい方
- ・いつもと違う環境で創作したい方
- ・気がねなく集える場として
- ・情報交換の機会として 等

ご利用料金	アトリエの画材を使う場合	500円
	画材を持ち込む場合	200円
	見学・付き添い	無 料
開催予定	第3土曜日(10:00~16:00) ※要予約	

※日程は変更場合があります。開催については、ウェブサイトとフェイスブックで告知いたします。

- ※新型コロナウイルス予防措置としてご利用の際には、事前予約をお願いしております。
- ※介助や支援が必要な方は、付き添いの方と一緒にお願いします。※車椅子の方もご利用できます。
- ※団体利用をご希望の方は、団体料金をご案内致しますのでお問い合わせください。

SANCと一緒に、障がいのある方の芸術活動をサポートしてくださる“サポーター”を募集いたします。興味のある方はぜひご連絡ください！

※経歴（プロ・アマ等）不問です。活動内容は、面談の上ご相談させていただきます。

サポーター
募集!

ご相談窓口

▶フォームから



▶電話から 080-2794-6195

▶メールから info@s-brut.net

SANCの最新情報はWebサイトとフェイスブックで発信しています。

▶SANC Web
www.s-brut.net



▶フェイスブック
www.facebook.com/sbrut.net



おわりに

2022年2月。佐賀市にあるホールでは、県内から集まったパフォーマーたちがステージ上でそれぞれのパフォーマンスを披露していました。

ダンス、弾き語り、独唱、演奏、ヒーローショーなど、一つひとつのパフォーマンスがとても個性的で、表現したい思いがこちらにも伝わってきます。

皆さんのパフォーマンスは、上手いとか下手とか、そんな物差しで測れるようなものではありません。とにかく自分たちの表現したいことが思い思いに繰り広げられます。

そんなパフォーマンスに心を揺さぶられながら、私は皆さんのパフォーマンスに「その人の人生が現れているようだ」と思いました。

思えば、人は生きていてだけでインプットとアウトプットの繰り返しです。目や耳や肌など五感から外界のあらゆる情報をインプットして、自分の中で情報を処理して、言葉や動作や行動でアウトプットしながら暮らしています。入る情報は同じでも、その情報を元にどのようなアウトプットをするかは人それぞれで、だからその人の言葉や動作や行動にはその人らしさが現れています。

つまり、日々の言葉や動作や行動もその人の表現だと言えるかもしれません。そのような日々の表現が積み重なって、その人の人生になっていくのでしょう。

皆さんのパフォーマンスは、自分が表現したいものがストレートに出ているからこそ、そのパフォーマンスにその人の人生が現れているように感じたのだと思います。

表現するとは、根源的で、日常的で、奥深い。そんなことを皆さんのパフォーマンスを観ながら感じていました。

とはいえ、ステージの上で自分をありのまま表現することは誰もができることではありません。だから、勇気と情熱をもってステージで表現をする皆さんのことがたまらなく素敵だと思うのです。

令和3年度のプログラムを実施できましたのも、協力委員の皆さまをはじめ、たくさんの方々にご協力や参画をいただいたおかげです。この場を借りてお礼を申し上げます。

そして、いつも私たちにいろいろなことを感じさせてくれ、心を耕していただいている作家やパフォーマーの皆さまに心から感謝いたします。

社会福祉法人はる 理事長

福島 龍三郎

令和3年度 佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書

SAGA ART BRUT NETWORK 2021—2022

[制作・発行]

佐賀県障がい者芸術活動支援センター SANC
社会福祉法人はる

〒849-0917 佐賀県佐賀市高木瀬町長瀬1168-1
Tel: 0952-37-7078 / Fax: 0952-34-1024
Mail: info@s-brut.net
Web: www.s-brut.net

発行責任者 | 福島 龍三郎 (社会福祉法人はる 理事長)
制作・デザイン | 大石 哲也 (SANC)
制作 | 嵯峨 昌紀 (SANC)

写真 | 大曲 耕平 (p.24 - p.27)

表紙: 「がばいアーティストたち展」実行委員会の発案・制作によるメッセージボード「がばいの木」と、メッセージやイラストが書かれた「ミニTシャツ」。(p.23に関連記事)

本冊子は「令和3年度 佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業」の一環として制作しました。

SANC
Saga ArtBrut Network Center
<http://s-brut.net>



 社会福祉法人 **はる**
Life Support HAL, Saga
<http://life-support-hal.net>



